指導者講座 第6回）

登山のための読図講習（1）

村越 真

オリエンテーリングの普及対象として有望なのがアウトドア活動者だ。たとえば登山者・ハイカーは、レジャー白書の調査によれば、600万人以上いる。彼らの中には、道標の完備したポピュラーなハイキングコースしか歩かない人もいるが、自分で地図を読み、道に迷わないような読図とナヴィゲーションスキルを必要とする人も多いはずだ。実際、山岳での遭難のうち、道迷いは毎年30%程度にのぼる。

▼紹介する遭難事例の例
事例１2003年11月、麻綿原（千葉県)で、中高年30名が道迷いで遭難。翌日無事下山した。地図にない道、複雑な尾根線などで、何度か道を間違えたため、明るいうちに下山できなかった模様。

事例２2003年６月、群馬県の親子が野反湖近くの山中で遭難。4日後に発見された。下山中、雪で倒された笹のため、そちらを道と勘違いした模様。

彼らの多くは、十分な読図やナヴィゲーション技術を持っていないと思われる。山岳遭難を研究している青山千彰氏（関西大学）の指摘では、彼が読図実験したルートにおいて、被験者が現在地を把握する際、コンパスの利用を許す群と許さない群での成績にはほとんど差がないという。これは逆に言えば、多くの人がナヴィゲーション用具としてのコンパスの使い方を十分に理解していないのだ。

こうしたナヴィゲーション技術を習得する機会の少ない彼らにとって、オリエンテーリングはよい読図のトレーニングの場となるはずである。筆者はこれまで登山者・ハイカーを対象として読図・ナヴィゲーションを数回にわたり指導してきた。これを紹介しよう。これは、次の３つの要素から構成されている。

1)室内での導入
　山岳での遭難と道迷いの実態、ナヴィゲーション技術の基礎的な考え方、現在地把握の考え方、必要に応じて尾根 谷の基本的な把握の仕方）
2)実際の山中での現在地把握練習
3)ミニオリエンテーリング

１）の導入では、山岳での遭難のうち、約30%を道迷いが占めることや、最近の道迷いでの遭難事例を紹介し、なぜ遭難に至ったのかの簡単な解説を加える。

多くの道迷い遭難の発端は、獣道や沢筋の踏み跡を誤って登山道だと誤認することから始まっている。これに対して、地形との関係で地図を読むことやコンパスを使って方向を確認することが有効であることを指摘する。

また、読図と一言で言うが、ナヴィゲーションの中での地図読みはいくつかのカテゴリーに分けることができ、それぞれの中での読図の特徴といった基礎的な考え方を紹介する。さらにその中で現在地を把握することが基本であり、また同時に最も難しいこと、現在地を把握するためにはただ地図記号が分かるだけではだめなことを指摘する。

基礎理論は退屈になりがちだが、こうした基本的な考え方を理解することなしに、地図をナヴィゲーションに活用することはありえない。その意味で、屋外での実技前の導入的な講義を重視している。もちろん、その中でも写真から居場所を探すフォト０のような課題を行なったりして、参加者に実際に頭と手を使ってもらうようにしている。

▲室内での講習の様子。プロジェクタなどを駆使しながら、風景（写真）と地図の読み取りを解説していく。

２）は講習の中心をなす部分である。１周2kmくらいで歩ける道の周囲に尾根・谷が豊富にある場所が最適である。その場所の1:25,000地形図を準備して、最初は解説も交えながら、100-200mごとに止まって、「ここはどこでしょう？」を繰り返すのである。またそう判断する理由を聞いていく。

私の経験では、ちょっと山の経験があるくらいの人でも、驚くほど現在地把握能力が低い。0-mapと地形図の粗さの違いはあるとは言え、たった200mくらいでも、全く見当違いの場所を指し示す受講者も少なくない。

アドバイス内容は、受講者のレベルによって違うが、このような受講者の場合には、基本的な考え方（まずさっき分かっていた場所から進んできた方向や距離を地図上で把握し、また大きな地形をとらえて場所を絞り込み、細かい特徴物に注目する）を示し、レベルの高い受講者には等高線の情報がどの程度役立つか、役に立たない情報は何か（畑が放置されて植生が変わっていることがあるなど）などを解説する。この部分は概ね「丁寧に教えてもらった」「等高線の細かい部分まで読み取れて面白い」「知的に面白い？」などの評価を得られている。

全体的には、私たちが当たり前に思っていることでも、彼らの多くにとっては新鮮な学習機会のようであった。

▲屋外での実習。ここでも地図と現地の対応が基本。見晴らしのいい場所で、丁寧に解説する。

次回は、３）のミニオリエンテーリングのポイントについて解説する。

（村越 真）